

自然を活かした山村の地域振興

秋神温泉経営「氷点下の森」主宰

小林 繁

◇ はじめに ◇

皆さんおはようございます。私が住んでいる飛騨とは違いますが、名古屋に参りますと暖かいという感じなんですけど、皆さんにとっては、やはり冬ですから寒い感じだと思います。

昨日からいろんな研究発表をなされたということで、私も内容については詳しくは聞いていませんけど、いろんな発表をするということは、やはり基礎になりますので重要なことだと思います。

特別講演と言っても、何の学もなく山の中で一軒の宿の中で、料理を作っていた人間で、本職は料理人なんです。全ての食べるものその食べる神秘性、そして味をいかに人々に喜んでいただけるか、そこには少し格好とか盛り付けなどに芸術性を持たせ、付け加えて皆さんに喜んでいただけるか、山の食べ方を研究した時代がありました。もちろん今から40年近い前ですから、若い私が京都あるいは岐阜へ行って旅を回って我が故郷へ帰ってみますと、非常に山の中の一軒の宿は冬が来ると誰一人訪れる人がいないんです。

変な話でございますが、私の親父は宿から4km下に電話とか色々ございますと用事に行きます。その時に自動車道路はもう雪で全部埋まっております。もちろん車が来ないのです。雪野原そこをいつも歩きながら鳥のいる所、山のある所を覗いて見たりオシッコしたり、色々して山を下がるのです。その次にくる人がまた同じ場所をオシッコした所までも同じ所に入って道が着くという時代だったんです。私が親父の後を継いで旅館をやらなくちゃいけない、つまり井勘定、旅館経営なんてのはしかも蜘蛛の巣商法と言う名前を着けたんですが、我々の先代が旅館というものを作ってくれた、そこには私がその蜘蛛の上に子供として育っている訳なんです。客が飛んで来る、昆虫が飛んで来るのを待っている。ところがなかなか捕まらない、夏はたくさんの昆虫が飛んで来て引っ掛かってくれます。網にね、ところが冬は皆冬眠しててあるいは休んでいて何も餌になるようなものは飛んで来ない。この蜘蛛の巣商法では商売ができない、これじゃ何か考えなきゃいけないなと言ってまず始めたのが氷だったんです。そんな風にして商売をやって来た私なんですけど。

森林関係そういった皆さんに私の話がどこまで通じるか分かりませんが、ただ私の先人があの大自然の中で、森やそしてその森の木を育て切って生活してきた人々の知恵を、今なんとか皆さんや私達が次の世代に受け継がないとこれはもう御仕舞になってしまう。あまり進みすぎた文明の中で、そういう忘れられていくものが非常に残念な貴重な物がございます、その知恵をですね、やはりどこかに掘り起こして行きたいと言うものが目的でございます。もちろん営林署という一つの天皇の時代から国の山、そして御料局と言う時代から天領いろんなものが続いて来る訳ですから、その中で守られてきた森林がドンドン開発されていく、もちろん集材機チェーンソーあらゆる分野ですね。木を切るのも運搬するのも発展してきた今日、ほんとに森は無くなっております。でもやはり素晴らしい物もたくさんあります、森を守る森から教えられる物をですね、見出していただきたい、そんな事をお話していきたいと思っております。

◇ 自然から学ぶこと ◇

飛騨川の源流のマイナスの水をプラスの水にかえる

氷作り28年（祭りから人作り、古里愛が生まれた）

まず、急いで作ったプリントで恐縮ですが、皆さんの所に自然についての事を書いておきます。私は飛騨川の源流を流れてくる冷たい冷たい水があったんですが、先ほど言いましたようにその水をどうすることもできなかつた水をホースに入れて飛ばせてそしてプラスの水、氷に変えたこのことについてまずお話していきたいと思います。

まず氷を作るということはですね、これは自然の中で育った私にとって非常に光栄だったんです。先ほど話しましたように蜘蛛の巣商法や井勘定で旅館経営をやっている。そのうちに日本の経済成長はドンドンと成長してきた訳です。その経済成長と共に人間は豊かな心になってくる、でも心よりもお金のほうに余裕が出来てくる。レジャーつまり観光ということが非常に目立って来ました。その中でスキー場を作ったらどうかとか、あるいは日本のいたる所でスキー人口が増えスキー場が増えて来ました。そんな時に私はスキー場を作ることができませんでした。もちろん私の家のすぐ旅館の山手には、当時久々野営林署の国体選手が、山の尾根をスキーを担いで歩いて上がって行くんです。そしてあっという瞬間に降りて来て練習するという場所もありました。そんなことでスキー場をやってみたいなという気持ちもありました。でもなかなか資本がありません、そこで一冬自然の事を勉強しながら考えてみました。

私が小学校の頃に4km程の道を毎日通わなければいけないのです。ダムができて私の友は皆去って行って最後に私が一人残る訳なのです。厳しい自然の中の雪道をトコトコと歩かなければいけない、そういうなかで、小学校1年生から6年生まで毎日通って行く中間の一番寂しく感じる所、断崖絶壁、その底のほうには深い川が青々と流れている。小さい子供心にはそれは怖い場所、恐ろしい場所でもあった訳です。そこを毎日通学しなければならない、その時に丁度その川向こうの方に、国有林がございましてその国有林のヒノキの森の中にですね、3mか4mの岩があるんです。その岩に水が染み落ちているのです、ところがその水が1月過ぎて2月ぐらいになると、だんだん凍って厚みがでて参りますと、とてもブルーなきれいな色に変わってきたのです、とてもきれいだったんです。子供心に一人で歩く道ですから、淋しい淋しい緑の森の中のそのわずかな氷なんですけど、ブルーの色というのが私の6年間の小学校時代の頭の中にずっと焼けこんでいたというのが現実なんです。その当時は只きれいだと思って通っていたのです、それがその蜘蛛の巣商法から何か脱皮しなきゃいけない時に、スケート、スキー場全てこれは無理だ、何とかいい方法はないかなと思った時に、あのブルーな氷はというのがイメージに浮かんできたのです。

今は町起こし・村起こしと言われてはいますが、その当時はそんな町起こし・村起こしは関係ないんです。私は自分の商売である旅館のお客を呼ぶために私が考えた事です。その当時、氷を作ることは大変なことだったんです、その計画を発表してやりました。そして当時ホースが無くて、それこそダムの工事が終わった後の宿舎に何百メートルも何本かホースを取っていたのです。そのホースを、工事屋さんは「こんなの取っていたら経費がかかるから、欲しい人があったらあげますよ」と。私はこれ幸いとばかり飛びついて回収に行ったのです。ところが草で押さえられ、もう何年も経っているから巻いても小さく巻けない、ジョイントはみんな錆びてくっついていて。男の人6人、車2台ぐらい持って通ったのですがすごい経費だったんです。でもその当時はホースが手に入らないから、このホースは最高に嬉しかったです。山だからモーターが使えない、電気が思うように行かない。だから自然の圧力が必要なのです、高低差約100mありますが、この100mの高低差の圧力を全部活用できな

い。と言うのは素人が線を張ったりワイヤーを張って持って来るのですから、カーブがあったりエアのバランスが取れなかったり大変な事なんです。水はタンクに入れれば下へ出て来るものと思ったんですが、なかなかエア調整ができない。そして全ての圧力を活用するようになるにはやはり2～3年かかりました。ここが悪いんだとかエア抜きを作ったとか、そんなふうにして水を飛ばせたんですが、なんとか最初の氷づくりに成功したのです。

地域の皆さんは、秋に水が飛んでいるのを見て「あいつは何をやっているんだ」と変わり者にされてしまいました。山の中に住んでいて「気がおかしくなったのではないか」と言われるような立場にまで皆に言われていたのですが、やはり氷を作ってみると見事な氷ができました。その時に報道が入ってきました、それは第1回から報道がニュースとして大きく扱ってくれました。どの新聞社の方も扱ってくれました。これがまた時を経て来る時非常に重要な私の資料となった訳なのです。氷を作って氷点下の森なんて名前をつけた時、「その名前だけはやめなさい、お客さんなんてそんな寒い所へは誰も来るものはいないぞ、だからこの名前はやめた方がいいぞ」と言われたことから、飛騨クリスタルとか色々なものを考えたんですが、やはり私は氷点下の森という名前をつけたのです。ところが今、皆さんが「どうしてそんな名前を当時つけたんだ」と言われるくらい、いい名前だと言ってくれるのです。

北海道にも一つ氷点下というのを使ったものがあるのですが、氷点下の森というのは使えないのです。私が氷を作っていてその最初のイメージは、小学校の頃自然の中を歩いていて私の心に焼き付いていた美しい国有林の中の森のブルーの氷だったんです。それが私を助けてくれたのです、ところがその氷を作ってずっといきますと、色々報道の中には話題性に富んでいって、テレビにも出ささせていただくようになりました。お祭りを始めて参りました最初第1回の祭りは「雪女の祭り」とつけたのです。というのはこの祭りを始めたのは国有林に関係があるのです。私の家から6kmほど上流の国有林の、当時冬の材木出し、これは青森県の方が来ていた、バチ櫓とかいろんな櫓の運搬方法を彼らはよく知っていた、その青森の方が入ってる中に、たった一人静岡の方が入っておりました。冬は毎日のように雪が降って仕事にならない、青森の人ですから皆さんは酒も強いんです。毎日ちよっと仕事してきてあとは小屋の中で酒を飲んでいる。漬物とか日乾しの辛いのを焼いてそれで酒を飲んでいる。ところが静岡から一人入っていた若い人は、おもしろくないのです。出稼ぎに来たはずなのに毎日酒ばかり飲んでいる「これじゃだめだ」と言って山を下ろうとするのです。皆は今日はだめだからやめなさいと言うのにその静岡の人は雪の経験がわからないまま、一人下って行くのです。ある程度の時間に小屋を出たのですが、下りは上りと違いました倍も楽なんです。雪が深いためラッセルはしないけれども、本当に足が三倍四倍と苦勞してくる。そのうち時間は刻々と過ぎていく、彼はフラフラになって体から汗が出て力が尽きてくる、そしてこれではダメだと言って、その後の話ですがとにかく道路の横の木に手をやると、手が凍っているからズルズルと止まらなくて倒れたこともあるようです。そうしてトコトコ私の家の近くまで来たのです。そして今氷を作っている現在の位置は、道路が全く違う山の手の方に着いていたのです。彼はその山の手を歩いて来る途中力尽きた所が私の敷地内でした。彼は日がとっぷり暮れていますからわからないのです。道を歩いて来てその時母親の幻が現れたと言うのです、変な話なんですけど本当なのです。その母の幻がその道から40m程離れた、今現在道路の横に雪の精の御精木としている大きな250年程のトチの木なんです。大きな穴が開いています。その木の所に行ってスーと消えたと言うのです。その人は母の幻について、横道に入ってその木の所まで行ったら、母が消えてそこで倒れるのですが、倒れた時に私の旅館の部屋の灯りがチカチカと目に入ったそうです。もしこの山の手の方で倒れたら全然光が入らない。でもそのトチの木まで行ったと言うのが不思議なのです。その木で

母の姿が消えたのですが、灯りが見えたのでフラフラとして意識朦朧として、私の家の玄関にたどり着いたのです。そして戸を開けようとするのですが、手が凍ってしまっていますから、半分やっと開けたと思った時に、意識を失ってガタガタと開けた間から家の中に倒れこんだのです。4年前に亡くなった私の母が、洗い物をしていた時、ゴトンゴトンという音で行って見たら男の人が倒れていた。初め見た時は60才ぐらいの人に見えたそうです、すごい凍傷にかかっていますから大事な事ですが、その人を中に入れて暖めてはいけません。だから私の母も玄関の所でいろいろ手当をしたのです。

私の父親は4km下へ電話をかけに行きました。電話をかけた会社の方ではもう死んでしまったと思って、当時大型のトラックの上にロープを張ってその上に戸板を乗せたのです。そうすると怪我人、病人は非常に安定して運べる訳なのです。タンカの代わりにクッションがあるのです。そういうふうにして診療所の先生が上がって来たのです、先生は「命は大丈夫だろう」と言うことで手当をした、先生も皆もその人を動かさないのですからお泊まりになられた。あく朝診療所の先生は、軍医だったものですから「お前、なんだ雪女に連れられて来たんじゃないか」と言って、元気良く声をかけたそうです。そうしたら目を開けて「お母さんが送って来てくれたんです」と話したので、その場に居た皆が青ざめたと言うのです。その時その患者さんに、私の母が重湯を作って飲ませた、その重湯にご飯粒が入っていたらそれも受け付けずに吐いてしまう、その位弱っていたのです。

そういう人助けがあって時は流れ、その年の秋に人助けをしたのだから表彰したいと、警察からお話があったんですが、私の親父達は「そんな事は当然の事だから」と言って表彰状を貰わなかったのです、あとからその表彰状を貰っておけば良かったと言ったんですが、それはこの祭りをやるようになってからです。実際に山の中に来た一人の若者と、自然との闘いの中で行き倒れになって命を落としかけた時に、母の幻が現れたのが敷地内の氷を作っている真ん中にあるんです。知らない人が聞いたらそれは作った話じゃないかと言われますがそうではありません、私が氷を作ったのも何かの因縁があったんだろうし、つながりと言うものは不思議なもんですね。そこで私は「雪女の祭り」と言うのをやっていたのですが、ある人から雪女と言うのは良くないと言うことで、雪の精の御精木と言う名前に変えて、現在の氷祭りが第23回目を迎えています。そして最初に氷祭りを始めた時は、お客様が45人、2年間45人です。私がマイク持って司会したり挨拶したり、全部やった時代があったのです。今は4千人の人が氷祭りの夜集まって来ます、3ヶ月間に2万人以上の方が見に来て下さいます、それから外国からも今年はアメリカ、ブラジルからお見えになられる。今は世界的に思わぬ所でビデオが放映されて人が集まって来てくれます。

この事が一つの祭りとして、氷を作った事が発展していく訳なんです、一番大事な事はこの祭りは山の安全を祈る祭りであると言うことも皆さんにお話しているのです。もちろん久々野高山営林署の署長さんにもお参りをいただくようにしております。祭りの中でもう一つ今度は、祭りはそういうふうになってきた訳なんです、祭りによって生まれてきた良い事、私が若い青年活動をやっていた皆さんに、色々力を貸していた時代がありました。その若者が氷祭りを始めると一人二人と私の周囲に集まってきてくれました。そして若者がもっとこうしよう、私が司会をやるからというふうにしてだんだん担当を決めて行くのです。つまり1人から5人になり10人になり15人になり、若者が集まって来てくれる。さあだんだん増えて来て喜んで大きくして行きます、25人以上になった時内輪では無いのところからトラブルが起こって来るのです、周囲の村のお偉い方々が「あいつは若い者に酒飲ませてうまい事やっている」と言うのが話になってしまう、村が氷祭りをポスターにしようとする、
と、「何で小林のためにやるんだ」そういうような事になって若者達も燃えて来まして、こ

れじゃいけない地域のためにすばらしい事だから、守る会を作ろうと言って『氷点下の森を守る会』を30人程で作ってくれました。この若者達がすごいスタッフとなって、全ての事を企画しあらゆる物を使うようになりました。そうしたらテレビ局が1時間の生放送を行うという事で、その時のスタッフが当時70人ぐらい来ました。その中でこちらの40人程のスタッフが、パッパとやるものですから、向こうのディレクターがびっくりしまして、最後に70人集めて「今日のご苦労さんでした、ここのスタッフを見なさい、田舎の若い者だと思っていたら、山の中の人達が一生懸命燃えてやっているんじゃないか、瞬間的に皆が動いている、その行動こそすばらしい人作りだ、皆さんも一生懸命頑張ってください」と挨拶があったのです。

私の村に獅子舞いがありました、いくつもの区に獅子舞いがありますが、その獅子舞いをやる人達はそれぞれの区で特徴を持っていたのですが、やっと8軒の区の獅子舞いは、村の中でも知られなかった。誰も見たことが無かったと言われる、悪評の獅子舞いとミソサザイの群れは見た事無い。胡桃島と言うのですが、胡桃島の獅子舞いとミソサザイと言う、小さな黒い鳥がおりますね、あれは単独で冬になるとチャッチャッと鳴くんですが、その群れを見た事無いと言われていたのが、今度は祭りに出て来てやるのです。そしてそれが勇壮になっていくのです、テレビにも出るようになった、8軒の区の人達はやはり焦りが出てきます、今度はもっと上手にやろう。2月の祭り前に練習をしようと言って一軒一軒回って皆で練習する。子供も出てくるんで子供も皆集めよう、そのために伝承文化と言うものが生まれてくるのです。キシッと守るようになってきて、この祭りが伸びていくのです。山の中の小さな祭りだったのですが、都会から多くの人に来ていただくようになった。でも私が今一番話したいのは、祭りは成功したことは確かなんですが、それ以上に山村の人々や若者が燃えてきた。これが一番大事なんです。今まで誰も来なかった暗い村が、冬になるとライトアップされて、何かきれいになって車がドンドン入って来て、そこに若者が集まってくる。若者は飲みながら「ああ、テレビ見ながらあのタレントさんと一緒に飲んだヨ」とか、そういう自信を持つようになって来た。私の郷土から出て行って都会のマンションに居る人達は番組を見ながら今日は故郷が出るよ、隣の人にも子供にも説明をしながら見てくれるようになった。それが毎年楽しみで今年はテレビに出るのですか、と質問を受ける事もあります。

一つの氷という物を通じて、若者が山に生きている、その根本は山の樵から始まっていると言うことです。山の静岡の方がそこで命は取り留めたその恩返しに私に帰って来たんじゃないか。その人のある新聞社が一時期捜して見たんですが、全然見当たらなかったのです。静岡の方も捜したのですが、どこの方かわからなかったのです、だから亡くなっているのかも知れない。だけどその人は私達に私の親にやってくれたことが、今私の子供に恩返しがあったんだとそういうつもりで、この祭りを私はやって行かなければいけない。山の中に生まれた一つの話、そこにもう一つ感謝の気持ちを含めた一つの人作りと言うものをやって来た訳なんです。

そんな一つの祭りが始まって今年で28年目の氷製作です。ところが世の中なんてうるさいもので、私が作っていますとそれは盗作だと言って、北海道からボンボンとやって来るのです。それは著作権の問題があったのです。その方は150から160の氷に関する著作権を取っているのです。でも日本で最初に作ったのは私でしたので、結果的には私が勝利を得て私には一切彼も言わないし采配をされなくなって氷をやっています。ところがNHKはすごいですね、丁度その事件が起こると同時ぐらいに私の所へ電話がありまして、全国ネットで放送するけれども、これは色んな問題が起きませんかと言う問い合わせがちゃんと

ありました、なるほどNHKぐらいになりますと、情報を得ながら問題点を考えてやっているのだと感心しました。今年も苦勞しながら氷祭りをやるためにがんばっています。今年2月14日ですので、チョコレートを持って来た人、女性に限って良い所に入れてあげますよと冗談言いながら氷祭りをやっているのです。

この氷祭りと御岳山を含めた周囲の自然を、いかに多くの人に見せてあげられるか、見せてと言うのは物を見て下さいではなくて、説明をして感動して帰れるものを作るか、それが私の大きなテーマの一つでした。ですから自然はすばらしいドクターである。自然こそ本当にすばらしいドクターである。その自然を求めて来た人に私はナースとして本当の自然はこんなもんですよ、きれいですよ、恐ろしいですよと言うことを教えてあげる、要するにナースとして脈を計って問診しながら、お客さんの様子そして困っている顔を変えていく。それが私の使命だと思って、自然という物に取り組んできた訳なんです。

◇ スライド ◇

これから自然のスライドをやってみますが、そういう意味で私は自然はすばらしいドクター、そして私はナース、私の所に来る人は皆患者だと、非常に表現が悪いんですけど、患者さんだろうとそういう立場でこのスライドを製作しまして、それをずっと長くやっている訳なんです。その辺について触れて行きたいと思います。

これは千間樽と言う国有林付近の牧場です。その付近から見る御岳とか乗鞍ですね、こういった冬の美しさを見ると皆さんはきれいだ、きれいだと言われるのですが、ここへ行くまでが大変なのです。そして行って見てその美しさに感動するという、そのすばらしさ、ここに行ってもっと雪が多くなって来た時期、太陽が照ってその太陽が沈みかけた時、寒さが厳しいですから急激に表面が凍ってきます。私が一歩足を上げるとその表面の凍ったのが、ガサッと落ちるのです。足を少し広げて伸ばすとゴソッと響きの音が聞こえて来る事があるのです。不思議な世界です。そういうような厳しい自然、雪が溜り雪解け水があり、森林ができ、その美しい森林は自然の中で四季を様々に変えて行くのです。

私の周辺には白樺があります。海拔800m以上から1,600m位までの間に、こういった白樺の美しさがある訳なんです。夏は夏でこの春の白樺から、こんなふうになってしまう。うっそうとした白樺にもどってしまう。何か熊が出そうでロマン性が欠けてしまう。ところがこの白樺が秋に葉を落としますと、静かに枯葉が舞い、やがて木々の美しさがこのように現れてきます。それはロマンの世界になるのです。そこには渡り鳥の群れが飛びかい、あるいはこの葉が舞い落ちる静けさと言うものは、本当にその森に行ってみないとわからない。その落葉を踏みしめて歩く自然の中の感触、そのような中に冬の厳しさがある。こういった厳しいものは、川の水でさえ凍らせてしまうような状態に陥ってしまうのです。ゴックと流れていた太い川には雪と吹雪によって川がどこにあるのかわからなくなってしまう。でもその底にコンコンと水が流れているのです。そこにはカワガラスとか色々な鳥達が餌を求めて冷たい水の中に潜って生活をしていく。もちろんその底にはアマゴやイワナあるいはトビケラや小さな妖精達がいる。そういう自然の厳しさの中に雪解け水と共に小さな花が咲いて来る。

自然の花の美しさというものは本当に見事なもので、例えば雪の中からもう芽を出しかけているのです、白いものは花びらでなくてガクなんです、このガクはカバに守られて雪の中に眠っているのです、その上を無造作に歩いてしまうとそれが全部傷の汚れた花に変わってしまうのです。静かにその水芭蕉が冬を越してやがて花をつける。カタクリの花がほんとに森の精のように美しい花をつけてくる、この美しい花の姿を見ながら感動していると、小さな昆虫達、蜂の仲間が飛んで来る、どこからか冬眠から覚めた虫達はその蜜を求めているのです、そういった自然を助けに行くのです。花がきれいに咲くだけでは無いのです、代わりに花粉の受精をしていただく、そういうお互いの助け合いの中に咲いて行くのですが、でも自然と言うのは何の容赦も無く雪を降らせて来たり、雪の中に突然花が咲いているのを見かける。でもそんな時は静かに花びらが雄しべや雌しべを守っているのです。

こういう自然の中の美しさ、一方では鳥達が囀っている渡鳥がだんだん渡って来ます。冬の鳥は遠くシベリアの方へ戻って行きますが、春の鳥が戻ってくるのです。中国大陸やインド洋の方から、そんな鳥達が巣作りを始めていく、これはとてもきれいなんです、そしてクマガイソウとかアツモリソウと言う花が咲き始めます。このアツモリソウとかこういった花は、昨年環境庁は一切売買はできない、譲る事もできないと言う日本の貴重な花となってきたのです。そう言う花が咲いていく、私の村にはかつて何百本もあった、ところが全部採られてしまって今では1本も無く環境が変わってしまって、大きな林になってしまった所もたくさんあります。

これは私の庭の中の花ですがクリンソウと言う花なんです。桜草の中で一番大きな花なんです、こんな花が山に一杯咲いていたのです、これは水辺にあって簡単に採れるんです、ですから山に行った人達がみんな採ってきてしまう、そのうちに無くなってしまう。原種は殆ど無いのです、ところがこういう花が外国に渡っていきます、そして品種改良されてまた日本に入ってくる、桜草の類これが祖先です、その原種になります。そういうふうにして花の世界は日本から消えて行く物が、外国に行って二世としてまた戻って来ると言うような世界もあるのです。

一つの生命つまり花が咲けばたくさんの蝶達が集まって来る、その蝶達がこんなふう誕生していくのです、私はこのような蝶の姿を見ながら不思議な事がたくさんあるのに感じます、本当にサナギ達はジーンと逆さまになっているのですけれど、時が来ると少しづつ動きかけてきます、そこから蝶の誕生が始まります、彼らが羽ばたく時、見事に青い空に飛んで行くのです。そして花から花へと飛びかう美しい蝶の世界があります、かと思えばきれいな花もあれば毒の花もあります、これは毒草です。トリカブトと言う花、花の格好で覚えて下さい、昔アイヌ人あるいは縄文人はその根から毒を取って毒矢を作って動物を獲って自分達が生きてきたのです。そういったものが今では時には保険に掛けられて殺されて行くという宿命もありました、奥さんにこれを飲ませたと言う例があります。

そんな夏が過ぎ去って行きますと、森は不思議なものでまた秋への気配を感じるのです、そんな頃になるとベニテングタケと言うキノコが出てきますがこれは毒なんです。でも八ヶ岳山麓の人間は、その毒のキノコを食べる事を知っているのです。人間も色んな知恵を持っているのです、これを食べちゃいけない、けども挑戦する人もいますのです、そして食べる事を知っている、このキノコを毒だと言っていたら御仕舞です。私はある時余りにもかわいいベニテングタケにロマンを感じました、ここへ小人を呼んで見たらどうかなと言う発想、小人達がたくさん集まって来て、梯子を作って登ったりしながら楽しんでいるのです、鼓笛

隊が来たりそういう不思議な事をしてみるとおもしろい、去年、色んな事を調べておりましたら、外国ではこのベニテングタケの輪の中に妖精が集まって来ているなんて本に書いてありまして、やはりどこも一緒なんだと言う考えを持ったのです。そういう遊び心、キノコは食べる物、毒は恐ろしい物、だけどその毒キノコに小人を集めてみたら最高のおもしろ味が出て来るのです。この辺の転換をやはりこれから必要じゃないかな、そういう遊び心が大切なんです。

そしてイワナが厳しい冬の冷たい水を迎える前に卵を産むのですが、なぜそんなに寒くなる頃に卵を産むのかなと言うと、彼らは冷たい水が雑菌を少なくする、その所にヒレと尻尾で穴を掘り卵を産み育てているのです。卵を産んで受精をして砂をかぶせる頃にはもう傷だらけになります。そんな弱った体で本流に戻る頃、森は本当にきれいに色を変えていく。

四季の中で結婚式のようなあでやかに最高の美しさは紅葉です、ところがきれいになろうとしていた時に、強い霜が降りて来ると葉は皆グチャグチャに縮んでしまいます、そしてアッとまに落ちてしまいます。本当に美しい紅葉と言うのは、そうですねまず5年に一度有るか無し、その美しかった森はいつしか葉を舞い落とさせる、北風が葉を運んで行きます、大地に積もって行きます。この落葉もちろんきれいな落葉ですけど、ブナを始めあらゆる木がその土地を肥やして行くわけです。そして自分達が生きるために葉を落とすのです、風が遠くから運んできてくれた他の養分も落として行くのです。そして森はいつしかすばらしい大地に変わって行く、そこに木が大きく成長して行くのです。森の中には葉が落ちて淋しい中にも、こんな美しさもあるのです、森の最後の美しさは黄金に染まるカラマツの林です。そのカラマツが見事に色を着けて行くと、やがて地上に舞い落ちてカラマツの葉の道はこんな風になるのです。全て落葉の道です、黄金の道です、今この上を裸足で歩いてみたら本当に自然の素晴らしさが伝わってくるのです、そういう経験を営林署、山に関係した皆さんが本当に体験されているのかどうか、もし本当にこういう体験をされたいと思ったら、私の所あるいは鈴蘭高原のあの別荘地があります、その別荘地の中の人の通れない道路はこんなふうになるのです。そういう所を素足になって歩いてみて下さい、足の裏が擦ったいような素晴らしい自然の感触が伝わってくる。ひんやりと木の冷たい感じもするのですけれど、木のすばらしさ木の葉の落として行ってくれたすばらしいプレゼントだ、そういうものを味わない、本当に味わえない人は気の毒だと思ふのです。山に関連した特に営林署の皆さんはその辺の触れ合いを体験しないとイケないのではないかと私はそんな事を思います。

葉が落ちてその上に白い粉雪が舞い始める頃、全ての氷のセットが終わっています。氷を作るセットその次には氷を製作する時期、真夜中に月が出て、満天の星の下にきらめく美しい氷の世界、これは他の人が見る事ができない素晴らしい神秘性に私は感動して作っているのです。それを皆さんに全部見ていただく訳にいかないんで照明とか、こういう物によって氷の美しさを演出して行くのです。非常に寒い中でこの氷の美しさに多くの方々が感動して下さり、氷祭りと言うものを実行して行く。

冬だと言うのに多くの方に来ていただくと、こんな美しさがあったとか、あらゆる物を見ていただくようにしております。でも冬には私が作っていく人工的な物以外にもっと自然の中には、色んな美しさがあるのです。

これは樹氷の朝です、国有林にはカラマツがたくさん植わっていますが、そのカラマツ林に太陽が昇る時様々に変化をして行くのです。その美しさは見事なものです、あるいは森の樹が全部凍ってしまうような時、風が吹くとコリンコリンと金属音が聞こえてきます、3cmぐらいの氷柱ができる事もあります。大自然の中で真夜中に氷のキラメキがあると話しましたが、こんなキラメキもあります。これはマイナス15度を越した時ですが、しかも2月の満月の夜なのです、あの満天の星と月の光によって、地上にできた結晶がダイヤモンドの海のようにきらめいているのです。そんな中に動物達が色々いるのです、野生の動物が生きていく、タヌキがいたりウサギが私の庭の中にいつもやってきます。またテンという動物がいます、テンはとってもきれいなんです、全くすばらしいです。犬でも追いつけないくらいです。屋根に飛び上がって向こうの裏の方へ行ってしまう。このような動物、あるいはキツネがいたりします。

森の中を歩いていますと、不思議な出逢い、これはアオゲラなんですけど、このキツツキがイタヤカエデの木に穴を開けるのです。イタヤカエデに自分の爪を立てて座って居る、その丁度嘴の高さに5つの穴を開けます。ところがイタヤカエデというのは樹液が出てそれが少し甘いのです。その樹液を飲んでいる鳥がいるのです。木に止まって左から右から出でくるのを次々と飲んで元に帰ります。シジュウカラ、ツグミの仲間がこの液を飲みに来ているという写真を全部撮っています。彼らが生きていく素晴らしい発見なのです。

木が凍っている事、木が生きていてその補給をしている事。それをさまざまな動物達知っている。そういう動物が生きていくには、弱肉強食の世界があって、冬の間には食べられたウサギの毛などが、森の中にたくさん散らばっている。かと思えば自然と言うのは不思議なもので、今後山を歩かれたら良く見ていただきたいのですが、ウスタミガと言うガの袋で、この中にサナギとなって入っているのです。この袋は実際には不思議な物で、袋をしっかりと巻きつけて止めているのです。はずれた場合を考えここまで延長して巻きつける知恵を知り工夫をしているのです。しかもこの中に入っているのは自分です、サナギから成虫となって出口がここにあり、これが両方へ開くのです。この隙間から水が入ってもここに溜まらないよう1mm程の穴を開けて、排水口まで作っていると言う自然の中の素晴らしい生き方をしているのです。

不思議な力、そして彼らのために今日まで守られて来た尊い生命、自然の中には教えてくれるものがたくさんあるのです、だから国有林に関係する人は、山を歩きながら確かに仕事で大変ですけど、周囲の物にもっと眼を向けて見る、その事によって自分も色々勉強する、教わる事がたくさんある。自然の仕組みは、私が山に生きながら本当に多く教わって来ました。花が咲けば蝶が飛んで来て優雅に蜜を吸っているだけではないのです。蝶が飛ぶ、蝶や蜂の仲間は、足に花粉を着けて飛んで行って受精をしてくれているのです。そういう生き方というものは全部仕組みられています、一匹あるいは単独でできるものではありません。

自然の明け暮れ、私は太陽が昇る時とか、カラマツの森に静かに太陽が昇り、雪が舞いあるいは煌々と照った太陽が一日を終えて、山のかなたに沈んで行く、そして登ってきた月はやがて今度は水辺に光を放ってロマンの夜を作ってくれる。太陽と言うものの素晴らしい、きらめく太陽が昇る時、その太陽の光を受けて昔の人は朝起きたら太陽に向かって手を合わせたのです。この精神を大事にしていきたい、地上の土や水はその太陽のエネルギーを受けて、森が出来て私達の生きるために素晴らしい物になっていくのです。色々な木々はこの地球上の空気をきれいにしてくれる素晴らしい機械なんです、しかも水を滾々と流してくれる。水を貯える素晴らしい森林なのです、この水が岩を潜り流れ下って大河となって、色々な工業や産業文化を発展させて来たのです。

私は山を歩いて疲れた時は、立止まって深呼吸を何回もやります、そうするとスーとしてきます、そういう健康法をやっているのです。そしてこの地域の自然をどうするのか、この森をどういうふうに育てていくのか、その辺まで考えてやっていきたい、それこそ本物が生まれて来るのではないかと思います。それと私は一般の方に呼びかけているのですが、きれいだと思う所には、自分が去った後誰かがやって来る、その時自分達のゴミ、小さなゴミでも持ち帰らなければいけない、これを基本的に山を守る人達に努めていただきたい。そして今一番大事な事は、自分達が守ったら次の子供達や孫にも伝えていただきたい。それがこれから一番大切な人間教育の基になると思います。この辺を重要視しながら、自然の美しさそして変わって行く自然の変化、山に行って恵みを受けて、英気を養うような自然、それが山に関係する皆さんにとって、一番大事な事、全て知っていただいて山を守っていただきたい事を願いながらスライドを終わります。

◇ 山を守って来た人々 ◇

知恵の時代 ～ 知識の時代

先人の知恵から……（豊かな人作り、森の大切さを学ぶ）

これからは山を守ると言うか、山を守って来た人達の教え、その知恵の時代を大切にしていきたい。先人の知恵の時代から山村とか全て自然は、知識の時代が変わって行ったのです。ところが今、知識の詰め込み過ぎで知恵と言うものが、どこかに忘れ去られてしまった。その知恵を掘り出して伝える事によって、自然や山や森を守る、そのことを基本にしていきたいと思います。

私は一番大切なのは料理の方で話しますと、石焼味噌と言う物を考えたのです、石焼味噌は有名になっていますが、私が考えたのが元祖なのです。何故考えたかと言いますと、昔山へ木を切りに行った人達の弁当のおかずは、煮豆、鱈の塩漬けぐらいしか無いんです。ところが味噌は毎年味噌玉を作って仕込みますから、本物の味噌はたくさんあります。その味噌を持って山へ行く、昼頃になると薪を燃やして湯を沸かしますが、その時石の上に薪を置いて燃やすのです。食事の時に火をよけ石を移動させ、石の上にお湯を少し注ぐのです、ジュジュと焼けている石が音をたて灰や余分な物が全部飛んでしまいます。その上に持って来た味噌を乗せて焼いて食べるのがおいしいと言う話なんです。これが昔の人の生活の知恵なんです。山仕事の人は、このような知恵を持っていたのです。その事を聞いて私は、そういう味噌の食べ方をして見ようと言うので、色々検討して石焼味噌と言う料理を考案したのです。

以前ここで緑の入門講座をやりましたが、今日も色々な資料を持って来ました。先ほどスライドで白樺の四季をやりましたが、この白樺はこのように皮を剥いては自然保護の立場から見ればダメなんです。剥かれた白樺は絶対に白くはなれ無いんです、黒樺になります。この皮は私の山で倒れた物を剥いた物なんです、ここに絵を書いたらすぐ売れますし、葉書にもなります。そして白樺は非常によく燃えるんです、少し乾燥させて火を着けると真黒な煙が出てよく燃えます。今日はこの分野の専門家であられる大内先生がお見えになられていますが、皮に灯油系の物が含まれているらしいんです。戦時中に松の根から油を採ったみたいに、これから灯油を採った国があるとか、そう言う話も過去に聞きました。確かにパチパチと音をたてて真黒な煙がたちます。

この白樺は不思議なもので、世界には非常に種類が多いんです、何十種類の白樺の中には、油を採った物もあります。皆さんが山に入ってどうしても火が欲しい、遭難あるいは雨が降っ

て来て何かしなければ、どうしても火を燃やさなければと言う時、昔の人はこれを焚きつけに使ったのです。焚きつけと言うのは薪を燃やすための火の元です、それには白樺の皮が良いので昔の人はこれで松明も作ったのです。

私はある時、国有林境の山の所に白樺の木が育っていたのですが、まだ虫の出る時期でも無いのに、小さな昆虫みたいなものが何匹も集まっている、不思議だなと思って樹液を舐めてみたら、何となくほのかなまろやかな味がしたのです。しばらくしてそんなに採れないけれども、この樹液から白樺のジュースを作りました。それが新聞、ラジオやテレビに出るようになる、ニュースを聞いた静岡の老夫婦がやって来まして、「シベリアに抑留されていた時に白樺の樹液で私は命を救った」と当時を思い出しながらしみじみと語ってくれました。いま日本全国で作っていますけれど、本当の味は出ていないようです。

ここで一つ木の利用と言う事で、営林署に関係のありました林正さん、あの方が亡くなられた時葬儀に参りまして、弔辞を営林局長さんと私が行ったんですが、その時彼は山男で死んだのだからと言う事で、山から木の枝、富山のスギ、トウヒとか色んな枝を集めて、祭壇の前で紫の風呂敷を広げまして一本一本枝を取りながら説明をしました、その時ブーンと葉の匂いがして来るのです。そして全部葉を取り終えた後、グイ飲みの盃を置いて最後の別れをしたのです。

一方では、高根村の日和田にチェーンソーを使う人がいます。上田君と言うのですがグリーンホテルという大きな所で結婚式の時、沢山の人の中でチェーンソーを使ったんです。新郎新婦入場と言う時に、録音したチェーンソーの音を鳴らしたのです。木の音が聞こえ何台ものチェーンソーの音が鳴り響く中、新郎新婦がチェーンソーとモミの木で作ったアーチをくぐり入って来る。「今日の結婚式は変わっています」と村長さんの挨拶がありましたが、皆さんに感動していただきました。

山の中には色んな木の実がなります、これは栗の実と毬です、山の自然の栗はおいしいです。山を歩いていたある時、山村の一軒のお婆あさんに出会ったのです。小さな栗の毬を乾燥しているのです、不思議だったから尋ねてみると「これはね、冬になるとネズミが入って来る、食料の倉庫の壁を齧られてしまう、ところが何を貼っても横から齧って来る、これを詰めて置くと入って来ないよ、だから10個程乾燥しているんです、これが一番大丈夫だよ」と話してくれたのです。人間の知恵とはすごいなと感動しました。こんどは私なりに考えて、栗が毬の中に2~3個できる、ところがここにどうしても実らない物ができるのです、靴と言います。これを小さい頃にままごとに使った記憶があるのですが、これに爪楊枝を指してみたらスプーンができたのです。これじゃおもしろく無いからもっと考えようと言う事で、山へ行って自然のクロモジを刺してみた。氷の中の喫茶店に置いていると、色んな人が来て「あっ、いいね」とか「これ売っているんですか」と聞かれ、是非売って下さいと言う人達がたくさんいます。

最近、時代が変わって来まして、これが昔の生活の知恵の勝栗と言って、子供を育てるために親は山に行き拾い、栗を茹でたりあるいは生のまま乾燥させる、ところが下に置くと駄目だから、このようにきれいにして糸を通して数珠栗とする。これを乾燥して置いて子供達が冬に食べる、だから歯が丈夫になり健康に良いのです。でも今こんな物を食べさせたら、堅くて誰も食べる事が出来ない、昔の人はこれを食べたんです。私はこれを逆に使って、何か大会をやった時とか、子供が何かやった時に表彰状としてあなたにこれを捧げます、一列にきれいにした物を渡すと、都会の子供達の目がキラキラして、それを見ていた親達も喜ん

でしまって、親は自分が貰ったみたいに自分を忘れて手を叩いて喜んでいる。生活の知恵の中に使われている物から感動するものもあるのです。選挙の時には勝栗と言いますから、どうぞ当選して下さい、勝って下さいなんて首に掛けたりする人もいます。

自然の素晴らしい中で、国有林には笹型、コケ型など色々ありますが、笹の所にヒノキを植えるのも大変ですね、そのために葉を播いて枯らさなければならない、枯らすと自然保護団体がワァワァ言ってくる、そこに働く人はそれをしなければ森を守っていけない、その辺の繰り返しをやっているのです。その自然の笹藪の中に、笹魚と言います、魚のように本当によくできているのです。中を調べて見たら蜂が卵を産んでいるのです、一枚一枚に卵を産んで子供ができて行くのです、魚釣りに行った人が、釣り上げた魚を提げて来るのと同じです。だから今度から山に入った時は、笹の中は嫌なもので笹の中を歩く程エネルギーの消耗は無いのですが、でも笹魚がないかと気をつけて見るような、山の歩き方をすればもっと楽しくなるのです。

◇ 自然の嘆きは文明を滅ぼす ◇

山村振興とは名ばかり、開発に必要な自然への価値

最近、御岳は有名なリゾート開発で名が知られています。大自然の素晴らしい所を開発すると言う事、森林を活かすと言う事、森林を使った体力作りや色々な物を基にして、人間と自然とのふれあいの所を作ると言う事がどんどん持ち上がって来ているのです。残念なのは道路の問題が一番気になっているのです、日和田から入って行くアクセス道路がキチッとしていないと人は来ないのです、でもあの素晴らしい自然を活かしたスキー場、色々な体力作りの施設を作るとすれば、せめてあんな真っ直ぐな道を作らなくて、もっと素晴らしい森林があるから、そのために考えた勾配の道路を作るとか、カーブがいくつもあるから交通安全に注意して下さい、と言うように森林や素晴らしい自然を見せる道路を作れば良かったのです。残念ながら山をカットして高速道路と同じなんです、都会の人がスムーズにスキー場へ来たのでは本当の自然とのふれあいの目的が全く違うのです。

地域の活性化対策だと言うのですが、あの内容の中で地元の高根村の人は、本当にあそこに働いてがんばろうと言う人がいるかどうかです。まず地元の人を大切にしてもらって、その人達を活かしながら山村へ都会の人々を呼ぶような開発を考えていかないと、本当の御岳と言うものは泣いてしまうのではないのでしょうか。

国有林は地主ですから、皆さんの力であの素晴らしい自然を活かした開発をしようと、どんどん訴えていただきたい。ただ木を切るのでは無くあるいは植えるのでは無く、あその価値観を皆さんが勉強してこれこそ素晴らしいと言うものを見出していただいて、自信を持って欲しい、皆さんが一丸となって色々な話合いをしながら、あの場に集まっていただいて、森を守るためにこうして欲しい、ここに来たら御岳の素晴らしい自然の生態系がわかるんだ、そういうものを皆さんが自信を持って言えるように勉強をしてほしい。これからの国有林はそういうところにあるんじゃないかと思います。

私は森の仕組みと言うものを本当に学ばなければ、これからその土地の人も滅びて行きますし、営林署の人もダメになると思います。森の仕組みと言うのは、地元の先輩を大事にして、その人達の意見を聞く、そういうディスカッションの場を設けていただきたい。国有林の今後の環境あるいは保全するための重要な国民の場であると言うことをワンポイントにして国有林が進んでいただきたい。

森ができるまでの仕組みの中で、おもしろいのはクルミなのですが、山に行くとクルミの実がたくさんいろんな所に落ちているのです、全然クルミの無い所に落ちているのです、不思議だったのは、リスとかネズミの仲間が冬の食料のために落ちたクルミを運んで行くのです。くわえて行ったのが落とされたり、忘れられたりしてクルミがあくる年、芽を出すのです。その行動範囲を見るとすごい広さなんです。そして私達はこのクルミを割る事はむづかしい、今の子供にクルミを食べなさいと言ったら、石の上に置いてガチンとやるのです、クルミは堅いですからパチーンと飛んでしまいます。次に飛ばないようにと思いきりパチンとやると無茶苦茶に割れて食べる部分はまず無いです。ところが昔の人は報恩講とか一年の行事の中に祖先に感謝する時に、クルミの料理を使うんですが、先の尖った所に水を付けて囲炉裏の火の近くになに置きますと口を開けてくるのでそこへ刃物を入れて割るのです。料理の知恵があるのです。

◇ おわりに ◇

森を守る一番大事な事、子供に教えた事がいつしか興味となって、自然の素晴らしさや森の尊さ、そして森の仕組みと言うものを教わって行って、やがて国有林まで発展して行くのです。ですから先人の尊い知恵を、その時代を守りながら掘り起こしながら伝えて行くという事が、山村地域の活性化の重要な課題なのです。